備後国分寺跡第４次発掘調査概報

1976

広島県教育委員会

備後国分寺跡第４次発掘調査概報

目　　次

１．はじめに……1
２．調査の経過……1
　(1)既往の調査……1
　(2)発掘調査の経過……2
　(3)発掘調査日誌抄……4
３．検出の遺構……6
　(1)講　堂　跡……6
　(2)塔　　跡……8
　(3)築地及び溝……9
　(4)弥生時代の遺構……10
４．出土の遺物……10
５．ま と め……18

図版目次

図版１．a．第３区講堂跡基壇（北より）
　　b．　　同　上　（東より）
図版２．a．第８区石積遺構　（東より）
　　b．第10区塔跡基壇　（北より）
　　c．第１区弥生時代遺構(南より)
図版３．a．第７区築地内溝　（東より）
　　b．　　同　上　　（西より）
　　c．第７区築地外溝　（西より）
　　d．第５区溝　　（西より）
図版４．出　土　瓦
図版５．出土弥生土器

挿図目次

第１図　第１区弥生時代遺構実測図……3
第２図　第３区講堂跡基壇実測図……7
第３図　第８区遺構実測図……8
第４図　第10区塔跡実測図……8
第５図　第７区東辺築地実測図……9
第６図　第５区北壁断面図……9
第７図　出土瓦拓影実測図……11
第８図　備後国分寺跡調査区配置図……12
第９図　出土土器実測図……15
第10図　出土弥生土器実測図……17

例　　言

１．本概報は、昭和50年度（第４次）備後国分寺跡発掘調査の概報である。
２．本概報の執筆は、松下正司、鹿見啓太郎、篠原芳秀、志道和直の分担により鹿見が編集した。
３．出土遺物及び図面の整理は、上記のものの他、草戸千軒町遺跡調査研究所所員がおこない、写真は福井、鹿見が撮影した。
４．図面中の方位はすべて磁北（真北より6°20′西）である。

1．はじめに

備後国分寺跡は広島県深安郡神辺町下御領にある現国分寺（古義真言宗）の前面一帯に所在するとされていた。この寺院跡の発掘調査は文化庁からの補助金を受けて昭和47年度から4年計画で広島県教育委員会が実施しているものである。初年度は文化庁の補助金50万円、県負担金50万円で第1次調査を行い、次年度からは補助金150万円、県負担金150万円の300万円づつで3年間行ってきた。本年度はこの計画の最終年次に当り、昭和51年1月7日から2月23日までの延38日間、県教委草戸千軒町遺跡調査研究所が担当して実施した。

備後南部に位置する神辺町は、弥生時代の遺跡や古墳群等が多く在り古代から栄えていたが、近年福山市のベッドタウンとして、住宅建設等の開発が一層増えてきつつあり、国分寺周辺にもその波が及んでいる。そのため、寺域や伽藍の確認とその保存が叫ばれている。

第1次調査で現国分寺参道西側に金堂跡と思われる建物基壇を検出し、第2次調査では南門跡、塔跡、講堂跡と推定される建物基壇の一部を検出した。第3次調査では第2次調査で検出した建物跡の再確認、寺域の確認を行った。

本年度は東辺築地の検出と塔跡・講堂跡等の遺構を明らかにした。

調査にあたってはつぎの調査員で実施した。松崎寿和（広島大学教授・県文化財保護審議会委員）、村上正名（福山女子短期大学教授・同）、潮見浩（広島大学助教授・同）、藤田等（静岡大学助教授）、本村豪章（東京国立博物館主任研究官）、川越哲志（広島大学文部教官）、河瀬正利（同）志道和直および松下正司（広島県教育委員会草戸千軒町遺跡調査研究所所長，福井万千（同指導主事）、鹿見啓太郎（同）、篠原芳秀（同）、加藤光臣（同）、志田原重人（同）。

また地元の神辺町、神辺町教育委員会、横山宗司（現国分寺住職）、菅波哲郎（県立神辺工高教諭）各氏の御協力を得た。

なお、地元の土地所有者、徳永友之、今本隆志、丁田宅市、仲田シゲル、宮永サトコ、山岡丈太郎の各氏からは調査の快諾をいただくなど多くの協力を得た。明記して謝意を表したい。

（鹿見啓太郎）

2．調査の経過

1．既往の調査

備後国分寺跡の調査については、昭和初期から現国分寺先代住職や、故土肥七郎氏その他の郷土史家によって行われ研究されてきたが、大規模な発掘を伴うものでなく、伽藍の推定や出土瓦の考察に留まっていた。

しかし、昭和47年に寺域と想定される参道西側の果樹園に、共同墓地拡張の工事計画が神辺町当局より出された。このため、県教委では直ちに文化庁や関係者らと協議した結果、事前の発掘調査の必要性を痛感し第1次調査にとりかかった。それ以後、第2次、第3次調査と行ってきた。

第1次調査は昭和47年12月から48年1月まで実施し、共同墓地拡張予定地を中心として8個

所の調査区を設けた。その結果、工事計画地内に東西29.4m、南北20m前後の南向きの建物基壇を検出した。この基壇は黒褐色砂質土と黄褐色粘質土によって硬く版築がされているが、上部の削平が著しく礎石もその抜取り跡も検出されなかった。この建物はその後の調査で金堂跡と考えられている。この建物跡は伽藍中枢部の重要な遺構と考えられたので、神辺町当局と協議した結果、工事を中止して保存されることとなった。

その他、北方で2個所の調査区を設けたが、延宝元年（1673年）の大洪水による土砂と大角礫の堆積のため、調査不可能となり遺構の確認はできなかった。

第2次調査は昭和48年12月から49年1月まで行った。この調査では参道入口付近と前年度検出した金堂跡周辺の建築遺構の有無や、寺域四至の確認の為、12個所の調査区を設定した。これによって、参道入口西側で地山の黄褐色土を削出した基壇の西辺と北辺を検出した。これは南門跡と推定されたが、道路や民家の下部に当るため規模は確認できなかった。参道東側に金堂跡と対称的な位置に設定した2個所の調査区からは、黒褐色土で版築された建物基壇の東辺が検出された。この建物は第3次調査の結果からも塔跡と推定できた。これら金堂跡や塔跡の北方、共同墓地の南に設けた調査区からは2個の座った礎石を含む基壇の一部が検出された。これは第3次・4次調査で講堂跡と考えられた。

また、寺域の西端を明らかにすべく堂々川を越えて西側に長い調査区を設けたが、瓦は若干出土するものの明確なる築地や溝は検出されず、寺域が堂々川を越えて西方に及ばないことが判明した。

第3次調査は昭和49年12月から50年2月まで行った。寺域の東・南・北端を明らかにすることと、伽藍中枢部を明らかにするため18個所の調査区を設定した。まず、寺域東端であるが、現国分寺参道を一応の伽藍中軸線とすれば一町東は八幡神社参道に当るので、この八幡神社参道沿いと南への延長線上に調査区を設定した。しかし、何ら遺構は検出されなかった。寺域南端は現国分寺参道入口東側の県道沿いに設定した調査区でも明確にできなかった。また，塔跡基壇西辺と北辺の一部を検出して、一辺18.4mの規模と考えることができた。さらに、講堂跡基壇の西端を一部検出した。

以上、第1次から第3次の調査結果については「備後国分寺跡第1次発掘調査概報」「同2次」「同3次」と3冊を各年度に略報告している。

2．発掘調査の経過

今次調査では伽藍中枢部の確認と、寺域特に東辺の確認に力を入れて第1区から第10区まで10個所の調査区を設けて発掘した。

第1区（25×2m）は金堂跡の西辺を北に延長した位置に設けた南北方向の調査区である。ここでは、講堂に取付くと思われる廻廊跡などの遺構確認を目的としたが、延宝年間の洪水による砂層堆積の下部では、寺院と直接結びつく遺構などは検出されなかった。その下層では弥生時代のピットや土器の入った土壙などが確認された（第1図)。以下の調査区でも、寺院創建時の地表下には弥生時代の遺物包含層や遺構などが確認され、国分寺はこれら弥生時代の集落遺構の上層に建てられと思われる。

第2区（11×1m）は東側廻廊を検出するために、参道東の墓地東南部に南北方向に設け、

ここでも寺院の遺構は明らかにできなかった。

第３区は第２次調査でその一部を検出した講堂跡を明確にするため拡張したものである。この調査区は当初南北に長く設定し（13×２ｍ）、基壇版築が北方で２列の石の辺りで終るのと、南側で落込む事を確認した。しかし、南側の落込みは後世の攪乱によるものと思われ、その南側には大石が崩落していた。北側の２本の石列を追って東西に調査区を拡張すると、この石列よりやや北側に２列の石組みが検出された。これらの石組みの基底部には、新しい瓦が詰っており、後世のものと考えることができた。

第４区（20×４ｍ）は寺域北端を明らかにすべく、現国分寺仁王門の西方に南北方向に設けたものである。この付近は参道入口からおよそ 200ｍ程北へ寄った地であるが、大洪水時の土砂と大石の堆積層が４ｍ以上も続いて、旧地表面に達せず危険なため調査を打切った。

第５区（18×１ｍ）、第７区（17×1.5ｍ）は寺域東端を明らかにするためのもので、東西方向に２本設定した。第５区で、幅2.6ｍの南北方向の溝１本と、第７区で同じく南北方向の溝２本（内側溝幅3.1ｍ、外側溝幅約２ｍ）を検出した。第７区の溝には瓦や土器等が堆積しており、寺域東を限る築地の溝と考えられた。また、第７区東寄りではこれら遺構の下層から多量の弥生土器の詰った南北溝が検出された。

第６区（12×１ｍ）、東側廻廊検出のため東西方向に設けたが、何ら遺構は検出されなかった。

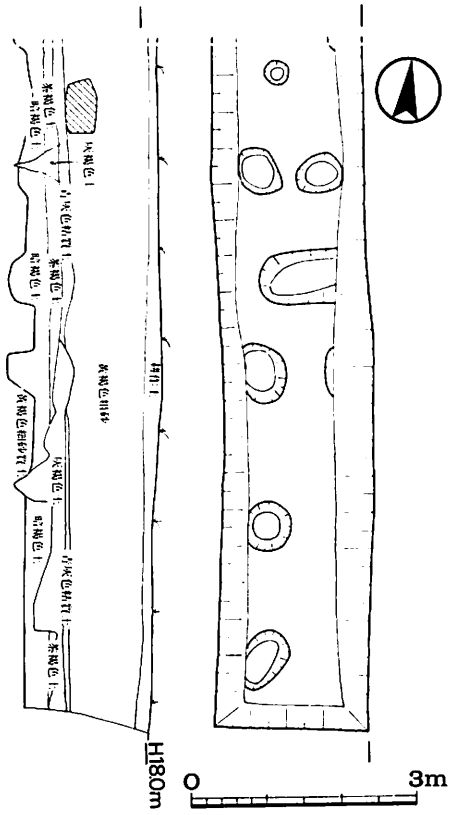
第８区は、第３区で一応講堂跡の北辺が明らかになったので、その南辺を明らかにするため参道を隔てた西南部に設けた（７×２ｍ）。ここでは、南寄りで面を南にそろえた東西方向の石組みを検出したので、この石組みを追って西側に調査区を拡張した（10×３ｍ）。その結果、石組みは南に折れ曲ってその中に３段の石段が組まれ、更に南に延びる事がわかった。石積みに囲まれた南側や西側では、時期は異なるがいずれも新しい瓦が堆積していた。しかし、それらの下部には明確なる基壇土が検出されなかった。

第９区は第３次調査３－13区の南端で、多量の瓦が堆積しており、この付近に建物遺構の存在が考えられたため、南方の参道沿いに細長く設けた（11×１ｍ）。しかし、ここでも瓦堆積面はあるが、明確なる基壇土等は検出できなかった。

第10区（５×２ｍ・10×１ｍ）はＬ字形の調査区で、塔跡の東北隅と廻廊の検出を目的とした。ここでは、塔跡の東北隅と思われる基壇版築土を検出したが、その位置に丁度後世の砂溝が走っているので、攪乱を受け明確なる隅はつかめず、廻廊はついに検出されなかった。

以上、10個所の発掘調査区総面積は約330㎡である。

（鹿見啓太郎）



第１図　第１区弥生時代遺構実測図

3．発掘調査日誌抄

1976年（昭和51年）

1月7日（水）神辺へ発掘用具を運搬。

1月8日（木）廻廊検出の為、第1区を設定。

1月9日（金）第1区ー写真撮影。褐色土層でピット、溝を検出。

1月10日（土）第1区ー褐色土の面を写真撮影。廻廊検出の為に第2区、講堂検出の為に第3区を設定。

1月12日（月）第1区ー平面実測。第2区ー排土作業。第3区ー講堂の版築基壇を検出する。

1月13日（火）第1区ー茶褐色土を掘り下げる。瓦・土器など出土。第2区ー排土作業。第3区ー北側で2段の石組を検出する。基壇上でピットを検出。

1月14日（水）第1区ー茶褐色土を掘り下げる。弥生時代のピットを検出する。第2区ー褐色土を掘り下げるが遺構は検出されない。第3区ー平面、断面実測。第2・3区ー平板測量。

1月16日（金）第1区ー写真撮影。第2区ーバラスの面まで掘り下げ、写真撮影。断面実測後、埋め戻し。第3区ー断面実測終了。石段を中心に東西に拡張。寺域確認の為、第4区を設定。排土作業。

1月17日（土）第1区ー下層の平面実測。第2区ー埋土作業終了。第4区ー黄褐色粗砂を掘り下げる。

1月19日（月）第1区ー茶褐色土を掘り下げる。第3区ートレンチ北部をさらに東西に拡張する。西側でその際第2次調査で確認された礎石を検出。寺域東辺検出の為、第5区を設定し排土にかかる。

1月20日（火）第3区ー拡張区で石列を2列検出する。これらの石列は創建時のものとは考えられない。第5区ー灰色土層上面で写真撮影。

1月21日（水）廻廊検出の為、第6区を設定し、排土にかかる。第5区ー灰褐色土層を掘り下げたところ落ち込みが検出された。第3区ー南と西へ拡張。

1月22日（木）第1区ー黄褐色土層面まで掘り下げる。弥生時代ピット・土壙などを検出。第3区ー西へ拡張。排土作業。第6区ー茶褐色土層を掘り下げたが遺構は検出されない。第5区ー溝を検出。断面実測。第4区…大型機械により排土作業。

1月23日（金）第3区ー西側へさらに拡張する。版築土が西端まで続く。第5区ー平板測量、写真撮影の後、断面を立ち割る。第6区ー暗褐色土層まで掘り下げたが遺構は見られない。写真撮影。第4区ー排土作業を行うが、危険なので作業を中止。

1月24日（土）第1区ー平板測量。断面実測。第3区ー写真撮影。第4区ー埋土作業。第5区ー埋土作業終了。第6区ー北壁断面実測。埋土作業。

1月26日（月）寺域東辺検出の為第7区を設定。排土作業にかかる。第1区ー精査してピット等掘る。第3区ー遺形設定。第4区ー埋土作業。

1月27日（火）第1区ー土壙・ピットを掘り上げ写真撮影。第3区ー平面実測。北側石列を据える時に版築基壇を掘込んでいることが判明。第7区…東へ拡張。排土作業。

1月28日（水）第1区ー下層平面実測。第3区ー平面実測。第7区ー排土作業。拡張区で弥生時代のピットを検出。

1月29日（木）第1区ー東壁断面実測。埋土作業。第4区ー埋土作業。第7区ー溝を検出、排土作業。

1月30日（金）第1区ー埋土作業。第3区ー石

列立面実測。基壇上面ピットを検出。第7区一溝を掘り上げる。東へ拡張する。拡張部で茶褐色土の落ち込みを検出。第5区一トラバース測量。

1月31日(土) 第1・4区一埋土作業。第6区一トラバース測量。現地説明会を行なう。

2月2日(月) 講堂西南隅検出の為第8区設定。中門北側検出の為第9区設定。瓦だまりがあるが遺構は検出できない。第3区…写真撮影。

2月3日(火) 第3区一基壇版築の状況確認の為小溝を掘る。第6区一平板測量。第8区一石列を検出。基壇の化粧積か。第9区一精査するが遺構の検出出来ず。実測、平板測量後埋土作業。9区を北に拡張する。塔北東隅と東廻廊検出の為第10区設定。

2月4日(水) 第3区一埋土作業。第9区一落ち込み・ピットを検出。第7区一写真撮影。

2月5日(木) 第3区一埋土作業。第4・7区一トラバース測量。第9区一写真撮影。

2月6日(金) 第3区一埋土作業。第7区一断面実測。東に向って落ち込みがあるので更に東へ拡張する。第8区一基壇西端検出の為西へ拡張する。第9北区一遺構実測後バラス層まで掘り下げる。断面実測後埋土作業。

2月7日(土) 第4・7・9区の平板測量。第7区一東拡張区から溝を検出。築地の東溝になると考えられる。第8区一更に西へ拡張。石列が南へ折れまがる事を確認。石列南側には新しい瓦の堆積がある。第9区一埋土作業。

2月9日(月) 第7区一平面・断面実測。拡張区の弥生土器を含む暗褐色土を掘り始める。第8区一写真撮影。第10区一排土作業。

2月10日(火) 第7区一弥生時代の溝を検出。第8区一西へ拡張。排土作業。第10区一遺構検出。

2月11日(水) 第7区一埋土作業。第8区一西へ拡張する。壇上に焼土と瓦の堆積を検出。

2月12日(木) 第7区一溝を掘り下げる。第8区一全体を掘り下げた後、写真撮影。第10区一写真撮影。

2月13日(金) 雨の為、瓦及び土器洗浄。

2月16日(月) 雨の為、瓦及び土器洗浄。

2月17日(火) 第7区一埋土作業。第8区一平面実測。第10区一平面実測。北側にトレンチを入れ、弥生時代の溝を検出。

2月19日(木) 第8区一立面実測。北部壇上を掘り下げる。版築土は検出されず、溝ピットを検出。西拡張区にトレンチを入れる。

2月20日(金) 第8区一断面実測。写真撮影。北部を掘り下げ弥生時代の溝を検出。第10区一断面実測。平板測量完了の後、埋土作業。

2月21日(土) 第8区一拡張区を掘り下げ、弥生時代の土壙、ピット、溝など検出。東側から埋土作業。

2月23日(月) 第8区一遺構を掘り上げた後、実測。埋土作業完了。今次の調査を終了する。その後3月中旬まで出土遺物の整理を行なう。

(志道和直)

現地説明会

3．検出の遺構

今年度の調査で明らかにした寺跡の遺構は、講堂跡と塔跡および東辺の築地跡などである。講堂跡は第３区において、第２次調査の第２－３区で確認した２個の礎石を含む３間分と、その北側に２列の石列を検出した。礎石は創建時の遺構であるが、石列は後世据えられたものである。第８区では東部で階段を有するＬ字状の石組を明らかにしたが、この石組も基壇の出土遺物から後世築かれた遺構であることを確認した。塔跡は第３次調査で推定した基壇の東北部に調査区を設定した。しかし、版築土は検出したが破壊が著しく明確な基壇の隅はつかめなかった。東築地跡は第５区と第７区で側溝を検出し、伽藍中軸線より90.３ｍの距離に位置することが明らかになった。このほか、廻廊跡および北辺築地跡等を検出すべく調査区を設定したが、明確な遺構は見られなかった。

各調査区の下層からは弥生土器の包含層とそれに伴うピット・土壙・溝などの遺構が検出された。

１．講　堂　跡

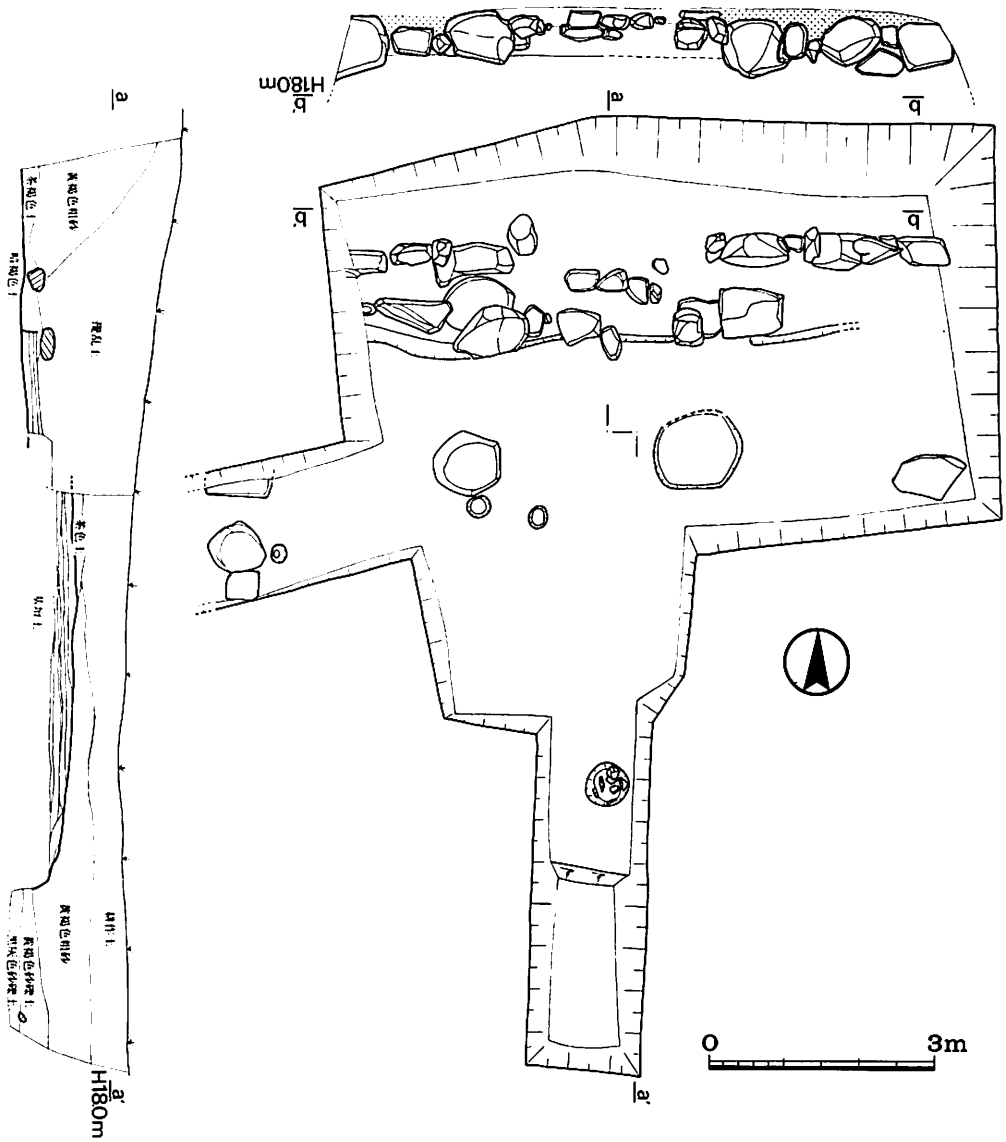
第２・３次調査により共同墓地南側に講堂跡を推定していた。今回この建物の規模を確認する為、第３区と第８区の調査区を設定した。

第３区では黒褐色砂質土と黄褐色砂質土とを版築した創建時の基壇を検出した。基壇上面では第２－３区で検出していた礎石に並ぶ礎石抜き取り穴と礎石３間分を検出した。さらにこの礎石列の北側で、版築基壇北辺を切り取り、中に石段を取り付けた高さ 0.８ｍの東西方向の石列が検出された。この石列は北向きに南北２重になっている。南側石列の石の中には暗褐色土に直接据えられている石もあるが、北側石列の石の下には新しい瓦を含む茶褐色土が入っている。石列の北側には延宝元年と考えられる砂層があり、講堂跡を利用して後世に何度か建物を建て変えているものと考えられる。基壇上面は後世のピットなども掘られかなり削平されていて、調査区南端ではかなりの深さの後世の掘り込みが見られた。版築土はここで切られているが基壇の南端ではない。又壇上には焼土が堆積していた。

礎石は造り出しを作らず上面を平滑にしているだけの簡単なものである。この礎石列によれば建物の柱間は約３ｍ（10尺）の等間であると考えられる。西より２つ目の礎石の南側を精査したが礎石を検出する事は出来ず抜き取られているものと考えられる。

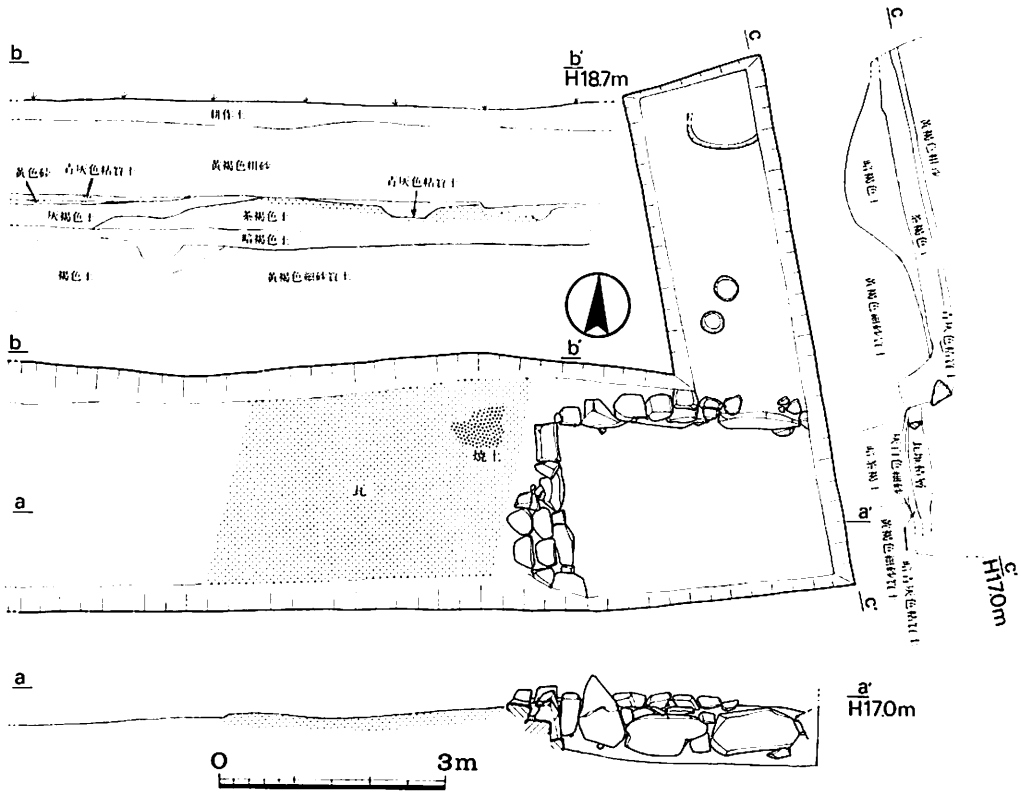
第８区では西側に３段の石段を持つ高さ 0.８ｍで南東向きのＬ字状の石組が検出された。この石組も第３区の石列と同じく、南側には後世の瓦堆積があり、延宝元年と考えられる砂層が入っていた。北側、西側の石組の中には瓦をかなり含む茶褐色土が入っており、北側茶褐色土の下には、土壙、ピットなどが検出された。西側の茶褐色土の中には石組南側よりも古いと考えられる瓦が多量に混入されていた。又この瓦堆積の下には青灰色の窯の床面が残存していた。第８区では第３区で検出された創建時の版築基壇はまったく検出する事は出来ず削平されているものと考えられ、石組は第３区の石列と同様のものであろう。

今回検出された礎石列は金堂跡、塔跡の方位とほぼ一致し、講堂北辺礎石列であると考えられる。第３－12区で検出された講堂西辺から基壇の規模は東西幅30ｍ（100尺）であると考



第２図　第３区講堂基壇　実測図

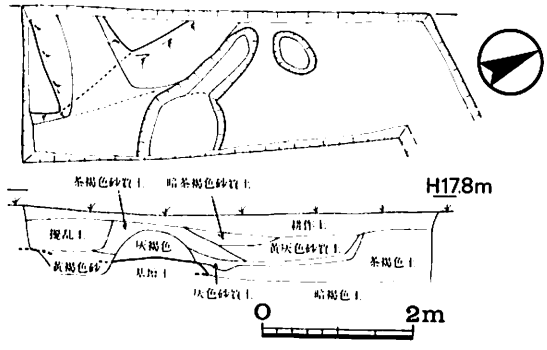
えられ、建物は桁行７間であると推定される。又版築基底部から礎石上面までの高さは約0.7mである。　（志道和直）



第３図　第８区遺構実測図

２．塔　　跡

第２次調査において建物基壇とその東縁の存在を確認し、第３次調査では基壇の西端と北端を検出した。南辺は民家が建っており明らかにできないが、一辺18.4ｍ（約61尺）の方形の基壇を有する塔跡ではないかと推定された。しかし、復元した基壇の方位は金堂跡の方位と大幅にずれていた。そこで、今次調査では建物基壇の東北隅と東廻廊跡を検出する為に第10区を設定した。耕作土下には瓦片を多数含む茶褐色土と撹乱土が堆積し、その下部の調査区南西隅で黒褐色基壇版築土を検出した。しかし、版築土は黄褐色砂の埋った後世の溝によって間を抉り取られており、基壇そのものもかなり削平されているものと考えられる。残存している基壇の高さは0.3ｍで、東に傾斜して落ちている。調査区内では第２次調査の第２－５区・第２－６区と同様に地覆石、雨落溝などは全く検出されなかった。ただ、性格は明らかでないが、底面に瓦片を含む茶褐色土の埋った落ち込みが２個所見られた。



第４図　第10区塔跡実測図

塔跡基壇の規模と方位は、今次の調査区においても遺構の残存状態が悪く、明確にすることは出来なかった。そこで、第３次

調査までに検出した遺構と今次調査で確認した版築土を考慮し、東築地跡の方位に合わせて復元した場合、約18(60尺)m四方の基壇が推定された。また、この方位は金堂跡の方位とほぼ同じであることが明らかになった。

なお東廻廊跡は第6区も設定して調査したが、明確な遺構は見られなかった。

(篠原芳秀)

3．築地及び溝

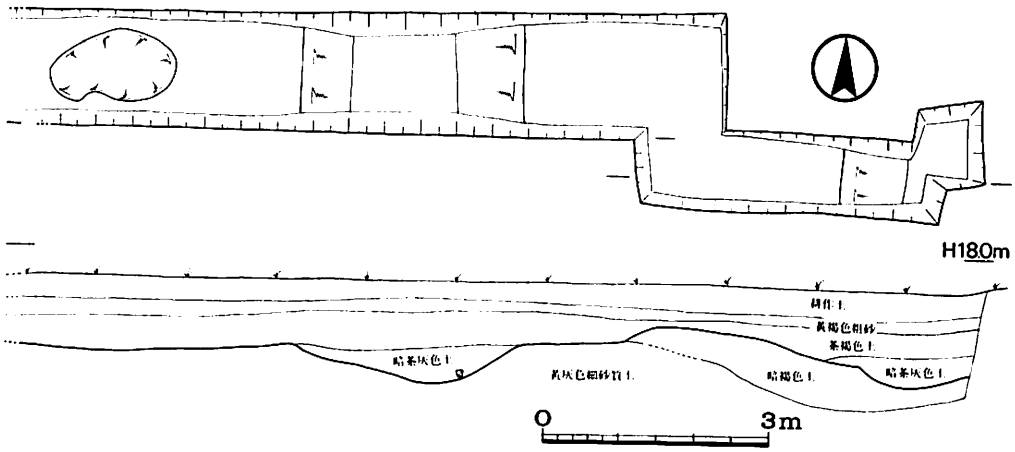
国分寺寺域の東辺を確認する為に第5区と第7区を設定した。

その結果第5区では地山を切り込んだ南北溝を検出した。幅2.6m深さ0.5mである。さらに第7区では築地とその側溝を検出した。築地本体はすでに削平されていて、幅は不明である。基底部幅は 4.3mで少し高まりが見られ、築地部と両側の犬先りであると考えられる。その両側には地山面を切り込んで側溝が作られている。内溝幅 3.1m深さ 0.5m、外溝幅約2 m深さ 0.4mである。側溝からは瓦など出土していて、築地は瓦葺であった事が知られる。出土した軒瓦は軒丸瓦Ⅳ類、軒平瓦Ⅱ類・Ⅳ類である。又出土した土器から、この側溝が平安時代にはすでに埋っていたと考えられる。

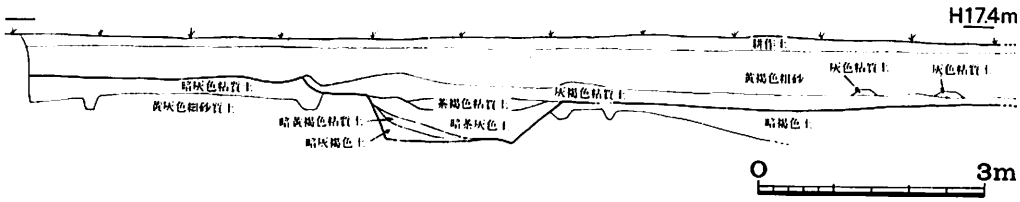
第7区の築地線を南に延長すると、第5区の溝は築地内溝であり、築地本体と外溝は削平されていると考えられる。

推定伽藍中軸線より築地心までの距離は90.3m(300尺) であり、これより外側には遺構が検出されていない事から、この遺構を寺域を取り囲む東辺築地であると考える事が出来る。

(志道和直)



第5図　第7区東辺築地実測図



第6図　第5区北壁断面図

4．弥生時代の遺構

今回の調査では、すべての調査区から弥生時代の暗褐色土の包含層が検出された。包含層の厚さは30cm～40cmぐらいで、国分寺全域に広がっているものと考えられる。包含層の下に地山を切り込んだ遺構が多数検出された。

主なものは第１区のピット群、土壙、第７区の南北溝（幅3.6m，深さ0.6m）、第８区のピット、土壙、東西溝、下層落ち込み、第10区の南北溝などである。これらの遺構はほとんど同一時期であり、地形からもこのあたりに弥生時代後期の集落跡を想定する事が出来る。

又この時期の遺跡として、高屋川北辺には方八町遺跡、古屋敷遺跡、御領遺跡、八丈岩遺跡などがあり、後期になって生産の高揚に伴ない遺跡の増加、拡大が見られ、これらの遺跡によって地域集団を形成していたものと考えられる。

（志道和直）

4．出土の遺物

今次調査では瓦類、土器類等が多量に出土した。なかでも、丸瓦・平瓦と弥生土器が圧倒的に多く、現在整理中であるので、ここではその主なものについて簡単に述べる。

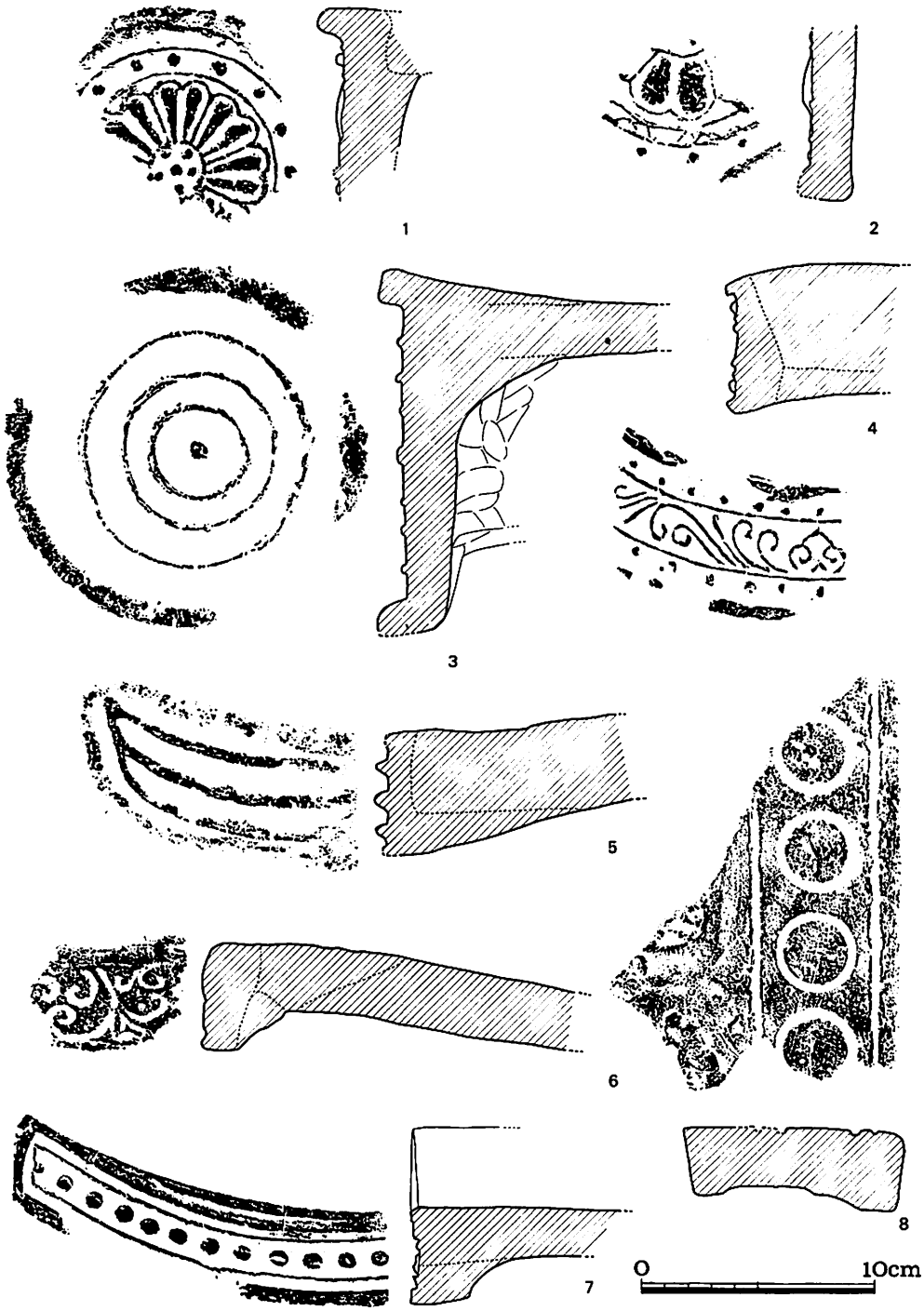
a．瓦　類（第７図）

出土瓦類については、第４区を除きほぼ調査区全域から出土した。軒瓦については別表を参考にしていただきたい。

１．は複弁蓮華文軒丸瓦で、第１表のＩである。外縁は素縁で内部に珠文が廻る。中房には１＋５の蓮子を配し、８葉の複弁が取巻く。灰白色を呈し、やや軟質である。２.は複弁蓮華文軒丸瓦である。小片の為、中心部や全体は不明であるが、やや幅広の隆起した複弁の外側に、唐草文と思われる文様が廻っている。外縁は珠文帯と素縁であり、青灰色を呈し、硬質である。３.は重圏文軒丸瓦で、圏線が細い方であり、青灰色を呈し、軟質である。重圏文については、圏線の太いものとほぼ同数出土している。４．は均正唐草文軒平瓦であり、青灰色を呈し、焼成は堅緻である。范の状態が良好で文様などすっきりした感じである。第７区の築地構内より出土している。５.は重廓文とも言える重弧文軒平瓦であり、黒灰色を呈し、やや軟質で砂粒などを多く含む。出土個体数が多い。６．は唐草文軒平瓦であるが、小片の為均正かどうか不明である。第３区南部のピット内より１個体出土した。くずれた感じの大柄な唐草文が陰刻されていて、青灰色を呈し、堅緻である。７．は珠文軒平瓦で、中央部に一列の珠文が配されていて、茶灰色を呈し、やや硬質である。８．は鬼瓦、右脚部に当るもので、外周の珠文などは陰刻されており、表面は撫での調整痕が著しく、黒灰色でやや軟質である。

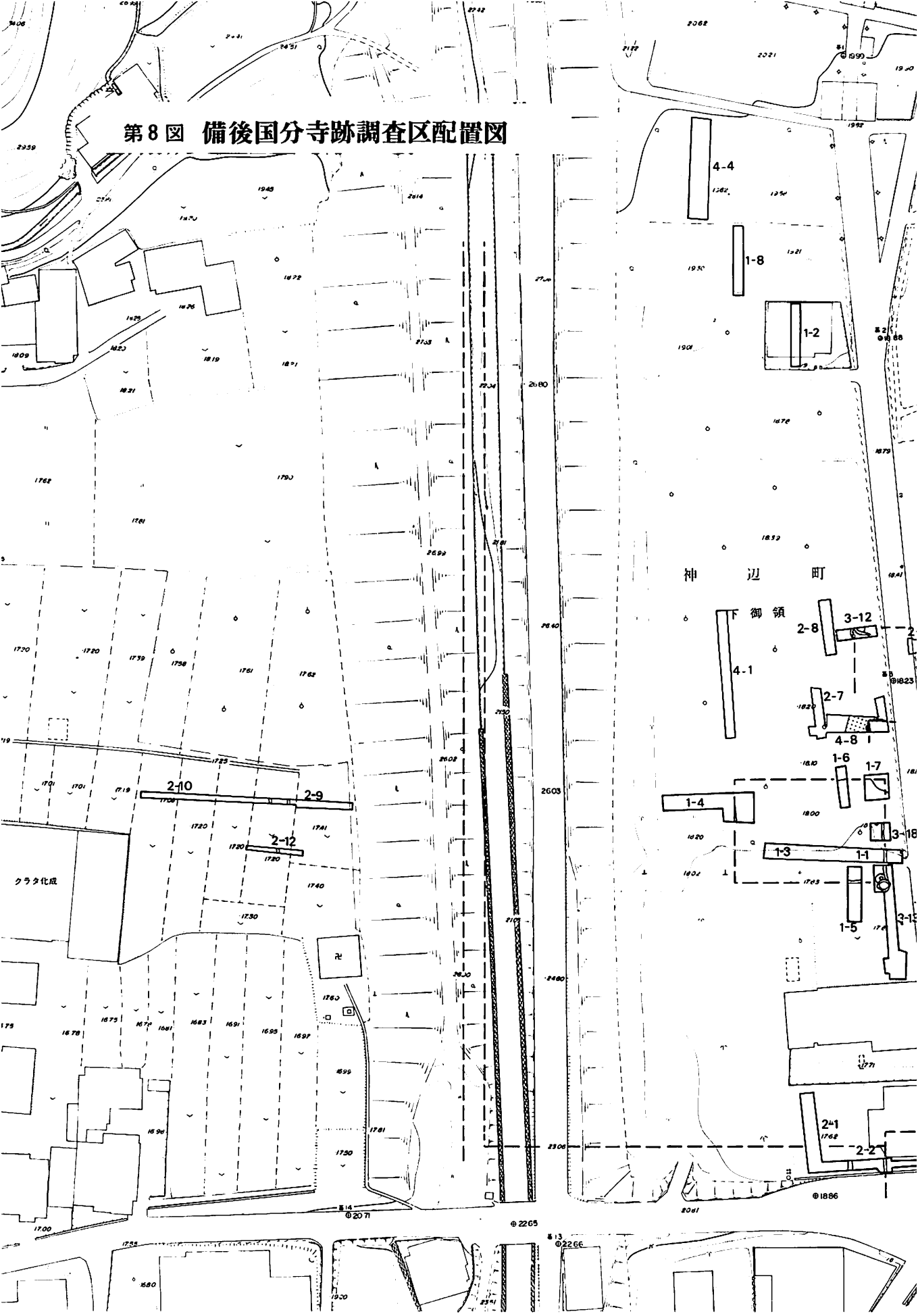
その他にも鬼瓦は写真図版に載せたものが出土したが、これは第３次調査において出土したものと同類であろう。以上、１．２．３．４．５．８．は奈良時代後期、６．は平安時代後期、７．は鎌倉時代に属するものであろう。

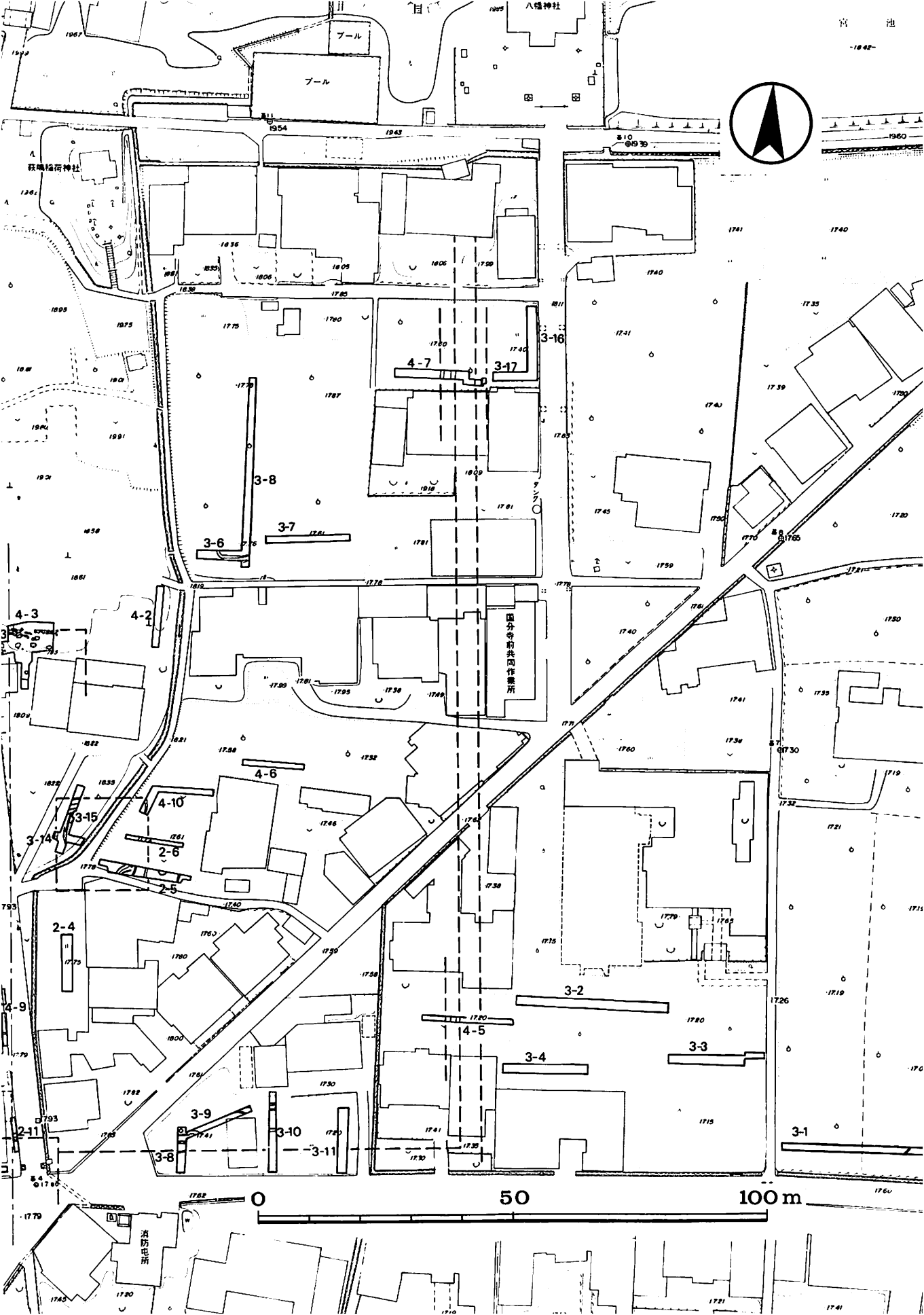
（鹿見啓太郎）



第７図　出土瓦拓影実測図

第8図　備後国分寺跡調査区配置図




プール
八幡神社
萩鳴稲荷神社
国分寺前共同作業所
消防屯所
3-16
4-7
3-17
3-8
3-7
3-6
4-3
4-2
4-6
4-10
3-15
3-14
2-6
2-5
2-4
4-9
2-11
3-9
3-10
3-11
3-8
4-5
3-2
3-4
3-3
3-1
0
50
100 m

第1表　　軒丸瓦分類計測表

形式	瓦当面 直径	中房径	内区 房 形	内区 房 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区 外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	個体数 第1次	第2次	第3次	第4次	計	%	備考
I	—	2.8	凹	1+5	8.4	2.8	F8	2.7	1.3	S	1.4	1.1	素	—	0	3	2	2	7	6	
II	—	—	凸	—	3.1	2.9	—	3.1	1.7	SK	1.4	—	素	—	0	1	0	1	2	1.8	
III	—	—	凹	—	—	2.3	T	2.6	1.3	S	1.3	0.4	—	—	0	0	1	0	1	0.8	
IV	17.0	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1.6	0.8	素	—	0	7	7	2	16	13.8	重圏文太
V	15.5	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1.5	1.0	素	—	0	5	10	3	18	15.6	重圏文細
VI	17.4	2.9	凹	1+4	9.2	1.6	T16	3.8	1.4	S	2.4	1.3	素	—	2	4	2	1	9	7.0	
VII	19.0	6.0	凹	1+4	15.0	4.5	T11	—	—	—	1.3	0.8	素	—	0	1	0	0	1	0.8	
VIII	14.4	—	—	—	7.8	—	—	3.3	1.6	S24	1.7	0.8	素	—	0	3	3	6	12	10.4	「薬」字
IX X その他															0	7	24	19	50	43.8	各種の巴文一括

第2表　　軒平瓦分類計測表

形式	瓦当面 上弦幅	下弦幅	弧深	瓦当厚	文様のさ	内区 厚	内区 文様	外区 厚	外区 文様	全長	個体数 第1次	第2次	第3次	第4次	計	%	備考
I	28.0	29.0	5.8	6.2	0.2	3.2	均正唐草	1.5	S	—	0	0	1	0	1	0.7	
II	27.0	29.0	6.0	6.4	0.2	2.7	均正唐草	1.6	S	—	2	8	6	6	22	16.9	

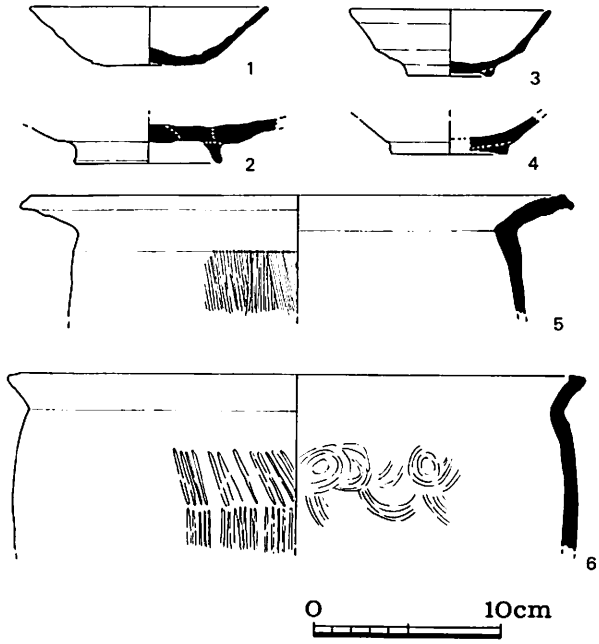
Ⅲ	−	−	−	5.5	0.2	2.5	K	1.5	S	−	0	0	2	0	2	1.5	
Ⅳ	−	−	−	5.6	0.8	3.5	重弧文	1.0	素	−	8	10	17	9	44	33.9	
Ⅴ	−	−	−	4.4	0.3	−	偏行唐草		素	−	0	0	2	0	2	1.5	
Ⅵ	−	−	−	4.1	0.2	4.1	K	−	−	−	0	0	0	1	1	0.7	
Ⅶ	23.8	24	3.3	3.9	0.4	1.4	S	1.1	素	−	0	0	0	1	1	0.7	
Ⅷ	22.2	21.6	3.3	5.7	0.5	3.4	均正唐草	上1.5 下0.9	素	−	1	0	11	4	16	12.2	
Ⅸ その他											0	6	11	24	41	31.9	

注：Fは複弁、Tは単弁、Sは珠文、Kは唐草　　（単位はcm）

b. 土　器　類（第9図）

（1－3）は土師質土器で1は底部に糸切り痕が見られ、内外面共に横ナデである。2．は貼り付け高台の椀で、内外面共にナデ調整である。3．は内面と外面上部が横ナデ、下部は不調整である。4．は軟質の緑釉陶器であり、高台を貼り付けた後、削出している。内外面共に箆磨きをし、施釉している。5．6．は7区の側溝から出土した土器で、5．は土師器の甕で外面ハケ目、内面をナデ調整である。6．須恵器の甕で外面は平行叩き、内面は同心円叩きを磨り消している。いずれも平安時代前半ごろのものである。

（志道和直）



第9図　出土々器実測図

c．弥生土器（第10図）

第７区南北溝と、第８区土壙出土の遺物に就いて一括して報告する。

甕形土器（１－３）１．２．は口縁端部を上下に拡張して、１．は凹線を施し、２．は横ナデである。外面上部はハケ目、下部は篦磨きである。内面は篦削りである。３．は「く」の字状口縁で、内面頸部まで篦削りで、外面は篦磨きである。

壺形土器（４－８）４．は長頸壺で、内外面共に篦磨きである。５．は口縁端部を傾けて拡張し凹線を施す。内外面共に横ナデである。６．７．は口縁端部を上下に拡張して、６．は凹線を施し、７．は横ナデである。外面上部はハケ目、下部は篦磨きである。内面上部は指頭で成形し下部は篦削りである。　８．は外反する口縁を持ち、外面刷毛目の後、篦磨きである。内面は頸部まで篦削りである。

器台形土器（９）口縁部と脚端部を拡張し凹線を施す。脚柱部外面は篦磨き、内面上部は篦磨き、下部は篦削りである。

鉢形土器（10－12）10．11．は内外面共に篦磨きの体部を持つが、10．は口縁端部を左右に拡張し凹線を施してあり、11．は口縁部を外反している。12．は外反する口縁を持ち、内面頸部まで篦削りで、外面はナデ調整である。

高杯形土器（13－16）13．は脚端部を拡張させ凹線を施す。外面丹を塗った後篦磨きをして、櫛描文を施す。内面は篦削りである。

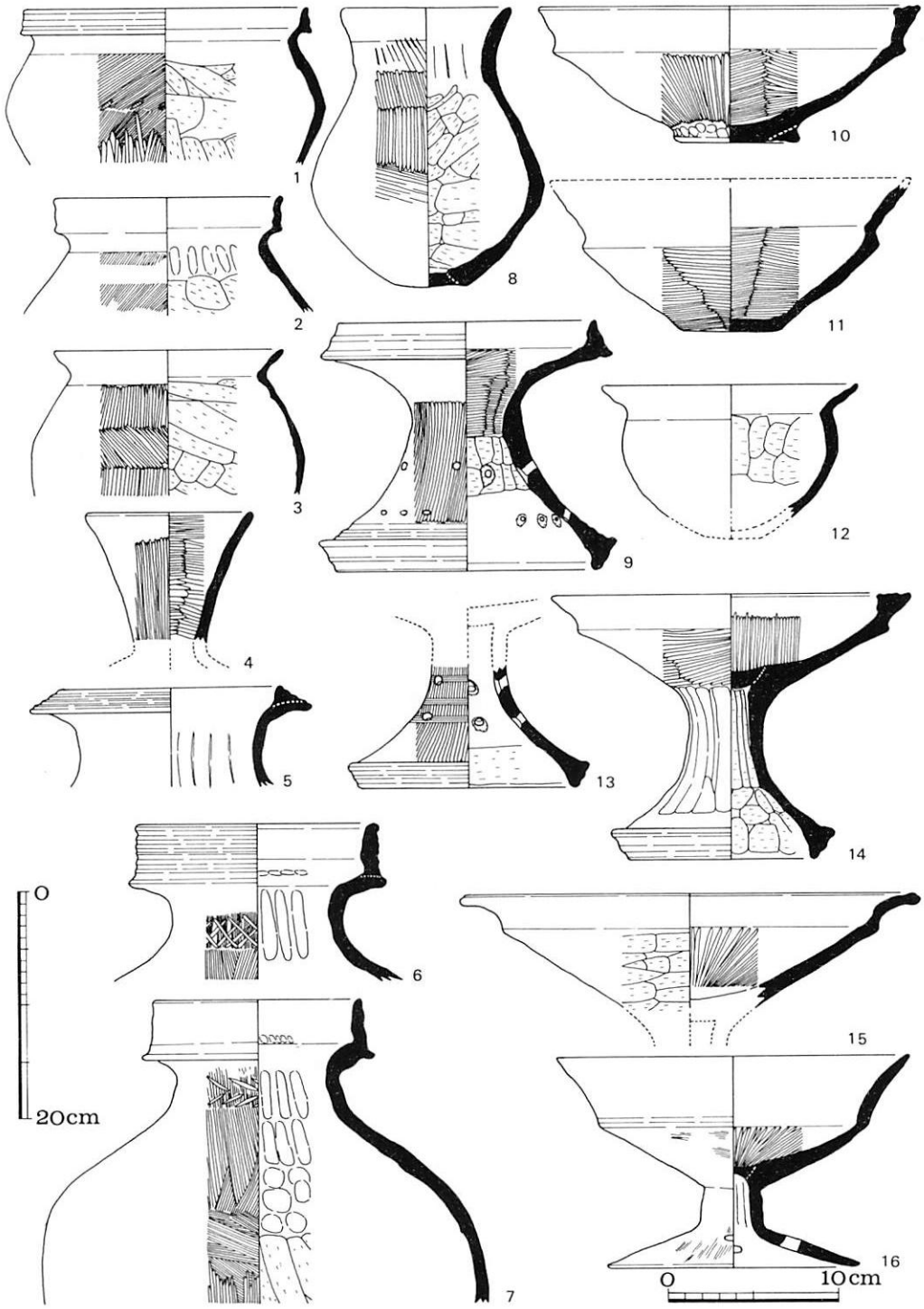
14．は口縁、脚端部を拡張し凹線を施す。杯部内外面共に篦磨きである。脚部外面は篦削り、をしてナデ調整、内面は篦削りである。15．は外反する口縁を持ち、外面は篦削り、内面は篦磨きである。16．は平たい杯底部に外反する口縁部を持つ。杯部内面は篦磨き、外面はハケ目である。脚部内面はナデ調整、外面はハケ目である。又この土器の胎土は13．と同じで他の土器と異なって、酒津遺跡（岡山県倉敷市）出土のものに類似しており移入された土器であると考えられる。

現在までの研究では、広島県東部の弥生時代後期（第5様式）の土器を神谷川式土器として位置づけている（注1）。今回出土した土器は、中期的様相を持つ８区下層の土器（４．５．13.）を除いて、弥生時代後期に比定する事が出来る。その中で口縁部に凹線を施しているものⅠ類（１．６．９．10．14.）、同様な口縁であるが横ナデ調整のものⅡ類（２．７．11．15.）、口縁形態が異なり、内面成形が違っているもの Ⅲ類（３．８．12．16.）などがあり、出土状況から見て、３型式に分類する事が出来る。

弥生時代後期には、岡山県南部を中心にして上東式土器が分布している（注２）。今回出土した土器の中にはこの地方から移入したと考えられる土器もあり、形態・製作手法にかなりの共通性を見せている。広島県東部もこの土器の分布圏の中に含まれるものと考えられ、地域的差異が無くなり、斉一性を持った土器を作る様になってくる。その後凹線などの装飾が失われ、製作が合理的になって、３．12．16．の様に酒津式土器に比定出来る土器が使われる（注3）。しかしながら、器台、高杯などの土器の中には篦磨きを施し丁寧な製作をしているものも見られる。

第10図縮尺は６．７のみ⅙、他は¼である。

（志道和直）



第10図　出土弥生土器実測図

5. ま　と　め

備後国分寺跡も4年次にわたる調査を終え、これまで厚い砂層に埋れて不明であった旧伽藍の大まかな様相をつかむことができた。寺域と推定された現国分寺周辺地域は、民家や墓地、果樹園等で発掘不可能な土地が多く困難をきわめたが、可能な範囲での調査によって一応所期の目的を達したといえよう。

さて、これまでの調査によって金堂跡・塔跡・講堂跡・南門跡を検出し、東に塔、西に金堂の並ぶいわゆる法起寺式の伽藍配置であることが明らかになり、国分寺の伽藍配置としては特異な一例として注目されていた。

今年度の調査では、これまでつかむことのできなかった寺域、特に北および東面築地の検出を最大の目標にして調査を実施した。その結果、東面築地は塔・金堂の中心、想定中軸線よりちょうど300尺(90.3m)で検出し、内外に巾3～2mの溝がめぐっていることが明らかになった。これを西面に折り返すと堂々川の堤防下になり、調査は不可能である。しかし、第2次調査でこの堤防西方部から遺構を検出しえなかったことから考えると、東西600尺であったと想定できる。北面は、延宝元年(1673)の厚い土砂のため検出できなかったが、仮に600尺四方とすれば、現国分寺仁王門の前面に収まることになる。

次に、伽藍配置を更に明確にするため中門跡・廻廊跡の検出も試みたが、削平されたものかついに検出しえなかった。講堂については、版築土および礎石からみて古い基壇の存在したことは明確であるが、近世初頭と考えられる改築がなされていたり、民家・果樹園等の制約から南面、東面ともに調査できず規模を明確に出来なかった。なお、近世の石組も階段等を検出したものの、拡張して調査ができなかったためその性格は不明である。しかし、洪水埋没前の国分寺の一端を明らかにすることができた。

なお、伽藍の方位は今次検出の遺構をもとに再検討したところ、磁北より3°51′西、真北より10°52′西であった。

一方、寺跡の下層からはどの地点においても弥生後期のピットが検出され、多くの弥生土器が出土した。国分寺跡と並行して調査した東南の御領遺跡地域をも包括する広大な集落跡と予想される。備後南部における終末期の弥生時代を解明する貴重な遺跡といえよう。

以上、4年次にわたる調査によっていわゆる法起寺式の伽藍配置をもち、600尺四方の寺域を有していたことが明らかになった。下層の弥生後期の広大な遺跡とともにまことに貴重な遺跡といえる。

今後はこの貴重な遺跡を保護するための最善の努力をしなければならないであろう。

(松下正司)

注1　潮見浩「山陽地方1」『弥生式土器集成』本編1　昭和39年

注2　伊藤、柳瀬、池畑、藤田「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　昭和49年

注3　鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編1　昭和33年

図版　1

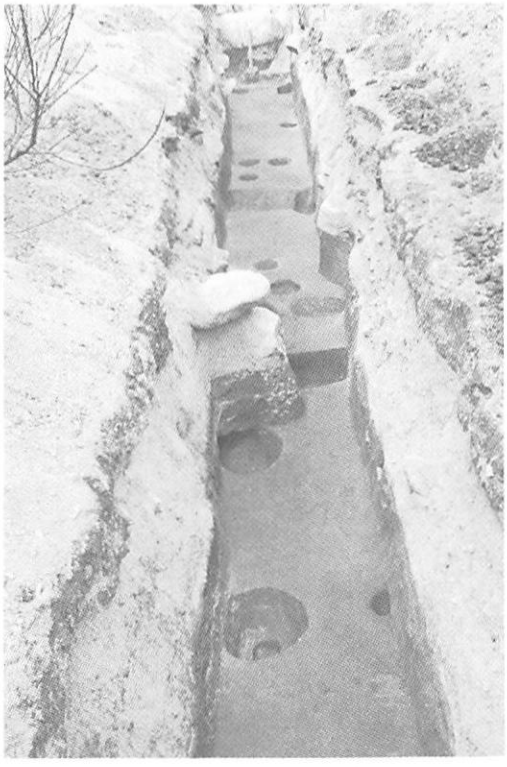
a．第3区　講堂跡基壇（北より）

b．同上（東より）

図版　2

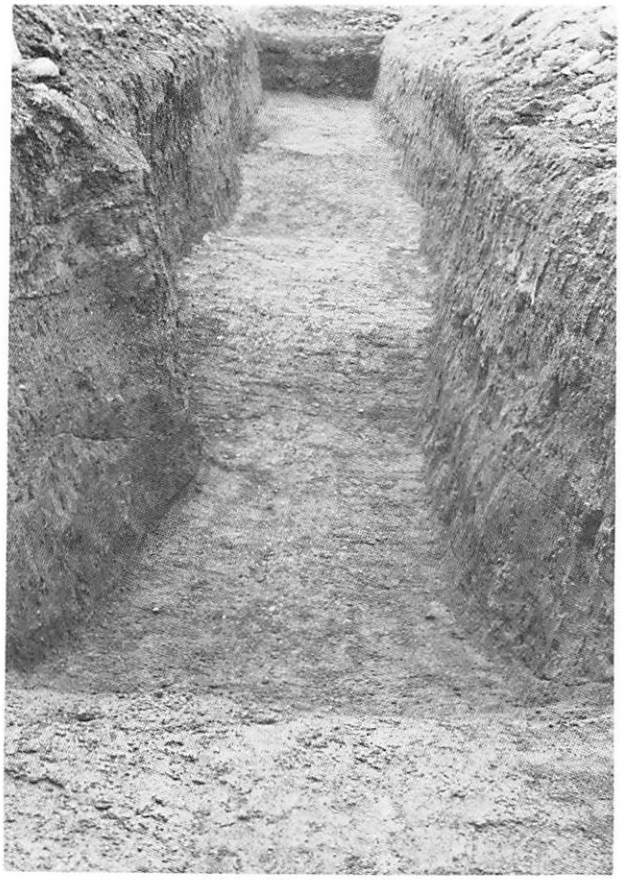
a．第８区　石積遺構（東より）

b．第10区　塔跡基壇（北より）

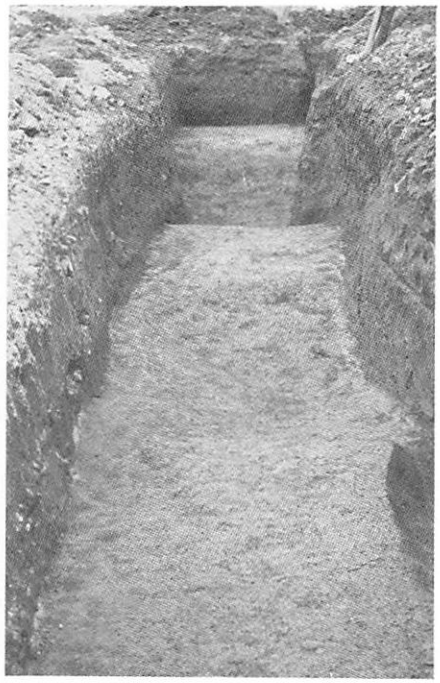


c．第１区　弥生時代遺構（南より）

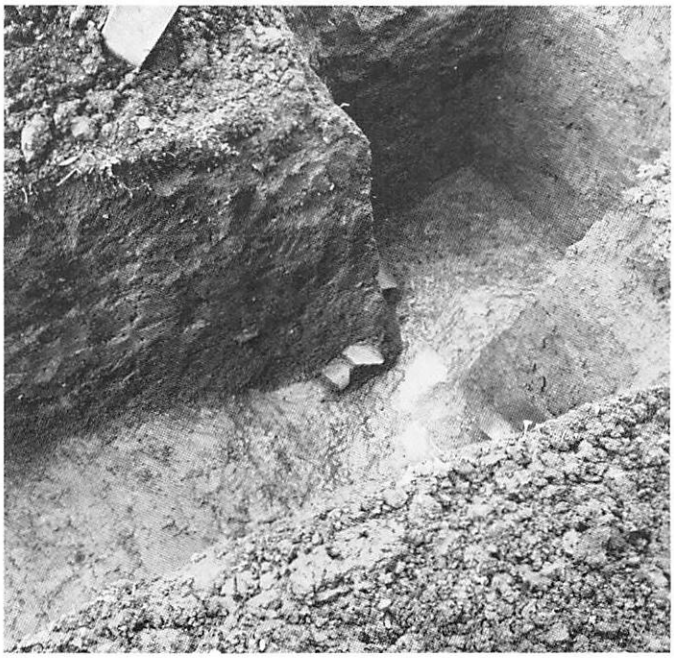
図版　3



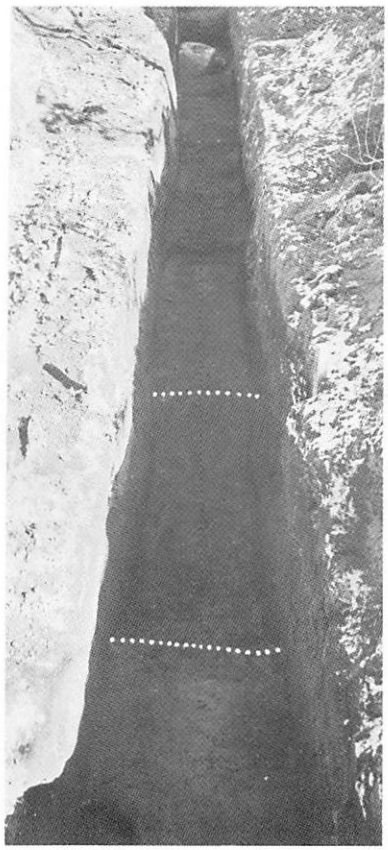
a．第７区　東辺築地内溝（東より）



b．同左（西より）

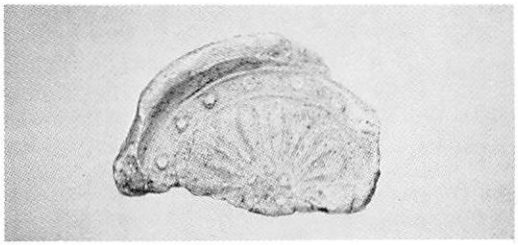


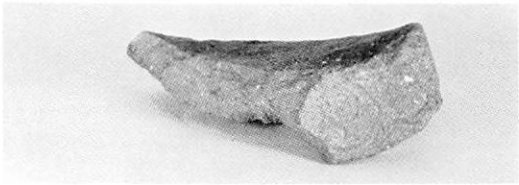
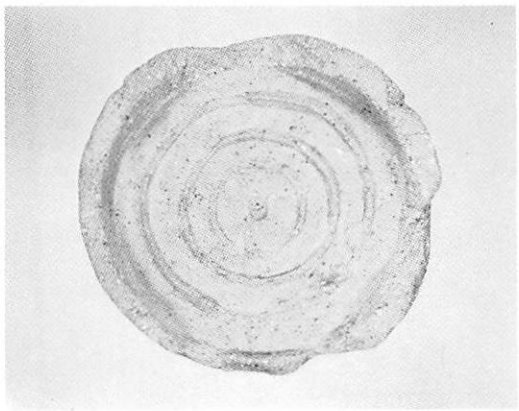
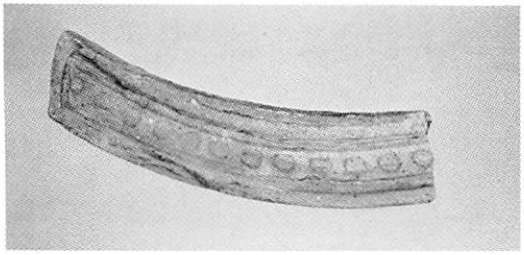
c．同上外溝（西より）

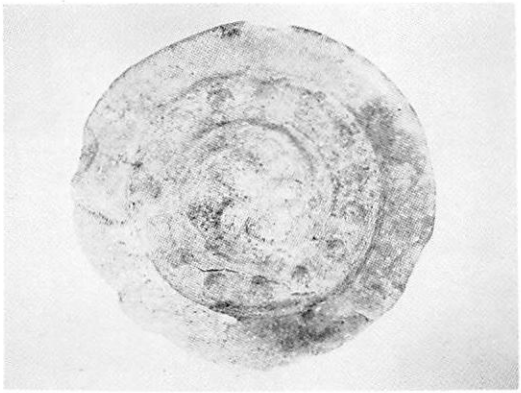
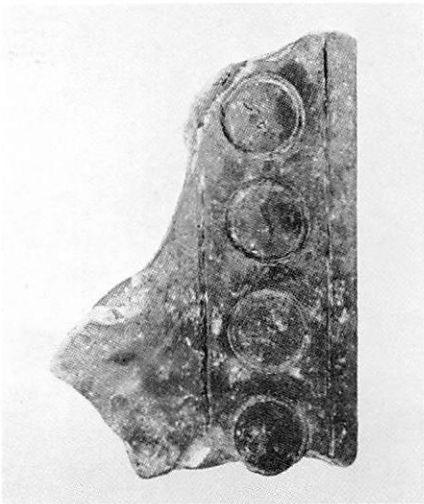
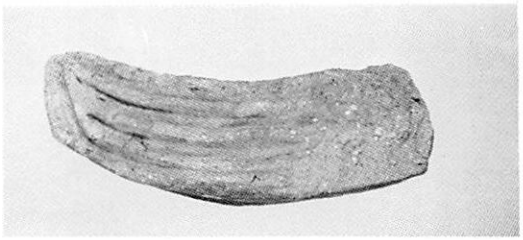


d．　第５区　溝（白線内）（西より）

図版　4

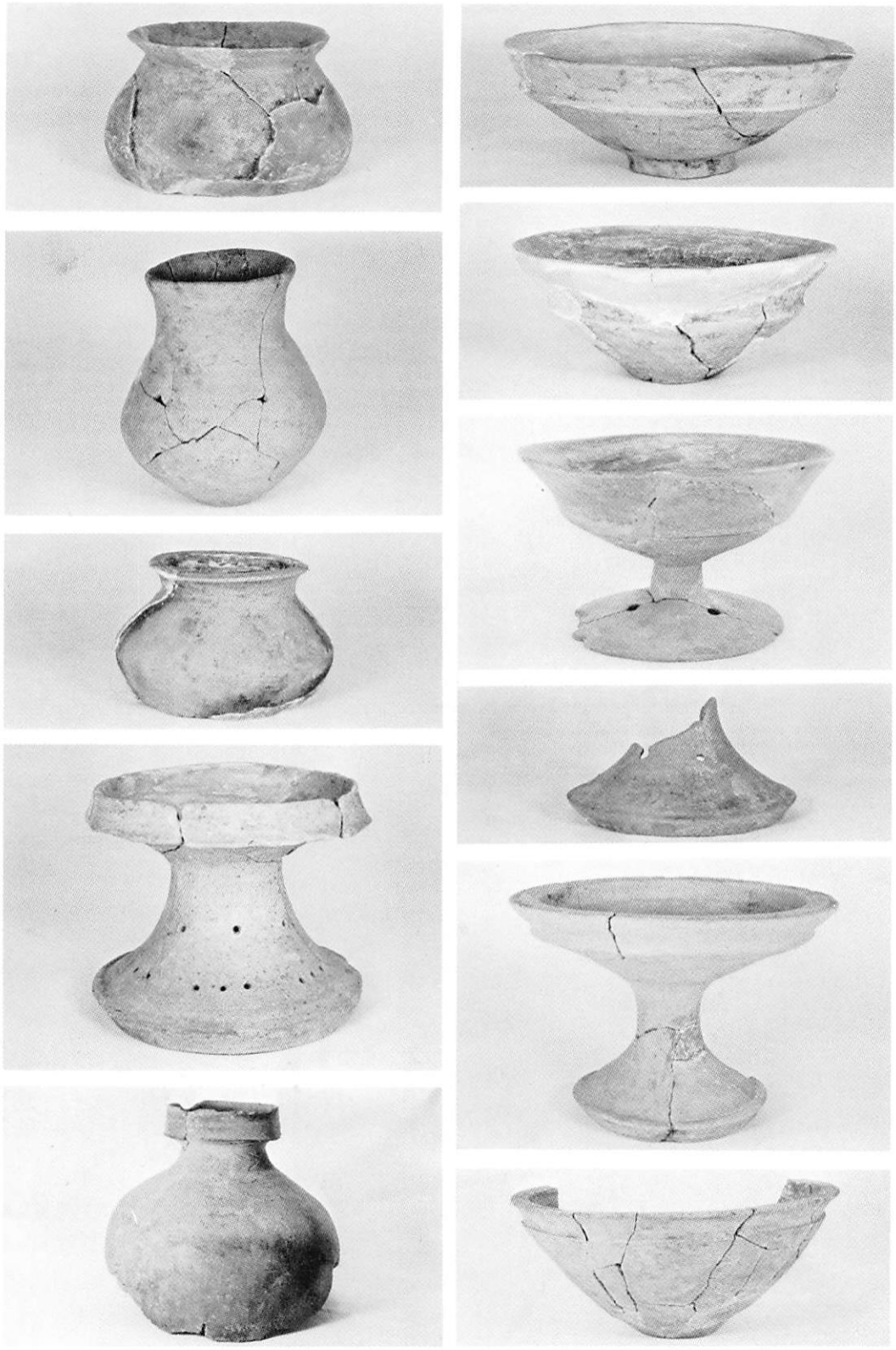


出土瓦（1：3）

図版　5



出土弥生土器（1：4　下段2個は 1：10）

1976（昭和51）年3月

備後国分寺跡第4次発掘調査概報

編集・発行　広島県教育委員会
印　　刷　文化印刷株式会社